

〔論文〕

デンマーク的身体の受容と想像力  
—デンマーク体操をめぐる—  
Reception of “Danish Body” and Its Imagination  
- On Danish Gymnastics -

田 渕 宗 孝  
TABUCHI Munetaka

---

国民形成過程にあって、体操は民族性をパフォーマンスに具現化し規律化するためのツールであった。ゆえに、体操家における想像力や、体操の受容にかかる言説を問うことは、その者たちの国や社会に対する考え方を問うことでもある。本稿では、デンマークにおける体操に着目し、その身体を通じた民族観を考察する。そのうえで、日本がそれを「デンマーク体操」として受容していった背景につき、その意味を問う。考察を通じて明らかにしたことは、体操の背景には理想としての民族主義的な農民像があり、体操の想像力とその受容には、国民高等学校およびグロントヴィ主義というシンボルが大きな意味を有していることである。

キーワード：体操、農民、ニルス・ブク、国民高等学校、グロントヴィ

---

## I はじめに

本稿の目的は、デンマークにおける体操およびその日本での受容に着目し、その身体論に内包されたシンボリックな意味を考察することである。体操とそれをリードする体操家は、欧州の国民形成の時期にあって、その重要なツールとして理解される。そのルーツは、18世紀後半のドイツのトゥルネンに始まるといえるが、19世紀に発展したドイツ体操家連盟には、体操が単なる身体運動にはとどまらない社会的意味を有したことが色濃く見ることができる<sup>1)</sup>。そうした傾向はドイツに限らない。ドイツ周辺に位置する欧州の小国では、国民形成過程においてそれぞれ独自の体操を創出し、ドイツ式の体操ではない「別の」体操を国民運動として促進していった。特に有名な事例は、19世紀後半以降に成長したチェコの体操団体ソコル (Sokol) である<sup>2)</sup>。福田宏によれば、「チェコにおいて体操運動は複数の勢力に分裂しつつも、そのいずれもが、ナショナル・シンボルを利用する形で自らの正当性を訴え始めた<sup>3)</sup>」のであり、つまりソコルは身体と精神を国民的な観点で規律化するための「教育」機関であった。

このように19世紀後半の国民形成期にあって、体操は国の大小を問わず、自国の民族意識を身体を通じて体現する重要なシンボルの役割を果たした。だがそれは19世紀後半に限られたものではなく、むしろそのピークは1920～30年代である。ジョージ・モッセ (George Mosse: 1918-1999) は、ドイツにおける民族的 (völkisch) なナショナリズムの生成に際し、1811年に始まるヤーンの体操運動以降、体操の言説がいかに効果的であったかを論じている。そしてそれは1930年代にヒトラーが「民族の生命力」を最もよく示すものとして体操家を挙げている

ことから、その言説的効果は持続的であったことがわかる<sup>4)</sup>。このように体操とは、祝祭などと同様フェルキッシュ思想の形成における一つの柱であり、身体を通じて民族に固有の「精神」を伝えるものとして受容されていた。

また身体をめぐる「精神」という観点でいえば、「ヒトラーのオリンピック」といわれる1933年のベルリン・オリンピックにおいて、その記録映画が制作されたことも無縁ではなからう。多木浩二は、この映画は「身体的なエキサイトメント（あるいは宗教的エクスタシーと言うべきか）を英雄的なトーンの中に昇華させる」という一種の神話化を可能とした<sup>5)</sup>とする。このように、身体が民族主義の文脈で接合する19世紀後半から1930年代に至る期間にあって、体操は単なる健康のためのエクササイズである以上に、社会のアイデンティティ的構造を支える枠組みであった。ゆえに体操家の理念には、そして体操そのものの語られ方それ自体には、フーコー的な身体を通じた規律権力と、「想像の共同体」を念頭にしたパフォーマンス的な意味が包含されている。

ところで1800年代中頃から1930年代にかけて、ドイツ以上に体操で世界的にも注目を浴びた地域は、北欧である。特にデンマークにおけるニルス・ブク（Niels Bukh: 1880-1950）の体操は、海外でも広く披露され注目を浴びていた。なかでもそれを熱狂的に受容したのは日本であり、ブクの体操は「デンマーク体操」として広く認知されてきた。上述したように、この時期の体操が民族主義と結びつきがあることから、デンマークのそれも同様であることは想像に難くない。ただ、なぜそうしたデンマークの民族主義形成に寄与した「デンマーク体操」が日本で受容されたか。それを理解するためには、ブクの体操理念とその背景に着目する必要がある。

本稿は上記の観点から、特にデンマークの体操に焦点を当て、体操の背景にある農村観の重要性を示し、もってその体操が同時代の日本にも強く受容された要因にも言及する。本稿の構成は以下の通りである。第Ⅱ章では、デンマークにおける体操発展の経緯と各時代におけるその意味を検討する。第Ⅲ章では、戦間期に生まれた「デンマーク的な」体操に焦点をあて、その創出者たるニルス・ブクの体操論を考察する。第Ⅳ章では、日本におけるブクの体操受容の背景につき、当時のデンマーク言説をめぐる想像力の意味を考察する。第Ⅴ章では全体の総括を提示する。

## Ⅱ 国民形成期におけるデンマークの体操とその意味

### 1. 「デンマーク的な体操」前史

デンマークにおいて体操は、欧州のなかでも相当早い段階から教育的に導入されていた（表1）。ロラン・ナウル（Roland Naul）は、特に軍士官学校および教員養成学校における体操教育導入が、それぞれ1804年および1818年と他の欧州国内と比較しても早い時期になっているとし、こうした体操教育を担う人材育成が早期から存在していたことが、早い時期での体操教育の普及につながったと指摘する<sup>6)</sup>。その背景には、ドイツの教育家グーツムーツ（Johann Christoph Friedrich GutsMuths: 1759-1839）の体操論、『若者のための体操（Gymnastik für die Jugend）』（1793）に触発されたフランツ・ナハテガル（Franz Nachtegall: 1777-1847）<sup>7)</sup>の存在がある。ルソーの影響<sup>8)</sup>を受けていた当時の皇太子、後のフレゼリク6世（Frederik VI: 1768-1839）の支援もあり、ナハテガルはデンマークにおける体操の主導者として、軍士官学校などで影響力を持っていた。しかしながら、汎愛主義を出発点とするナハテガルの体操

論は、兵式体操の分野で大きな貢献をしたものの、結果として体操のもつ想像力を「デンマーク的なもの」に昇華させることはできなかった。学校教育としての体操も、「デンマーク的なもの」を強く主張するリベラル左派勢力には、ドイツ的なものの押し付けとして理解された。そのことは、後の1858年に、リベラル勢力が国会にて学校における体操廃止を主張し、それを保守勢力が棄却するという構図が生じたことから指摘できる<sup>9)</sup>。そのため、ナハテガルが「デンマーク体操の父 (den danske gymnastiks fader)<sup>10)</sup>」と称されることはあっても、その体操は戦間期以降の「デンマーク的な体操」とは一線を画するものとして理解される。

表1 欧州諸国の教育機関における必須科目としての体操の導入年

	初等学校 (Grundskole)	中等学校 (Mellemskole)	ギムナジウム (Gymnasieskoler)
ドイツ (D)	1879		1860
デンマーク (DK)	1814	1828	1828
フランス (F)	1880	1868	1868
英国 (GB)	1944		1902
オランダ (NL)	1889	1863	1879

出典：Naul (1998), s.38より筆者作成

## 2. スウェーデンのリング体操

しかしながら、こうしたデンマークにおける体操の普及は、その後の「北欧的」な体操の誕生を促す契機とはなかった。その出発点が、スウェーデンのリング式体操<sup>11)</sup>である。これはスウェーデンの体操家であり、かつ詩人、作家でもあるペール・ヘンリック・リング (Pehr Henrik Ling; 1776-1839) によって創出されたものである。

リングはルンド大学にて神学を学び、最終的にはウップサラ大学にて学位を取得後、1799年から1804年にコペンハーゲンに在住し、コペンハーゲン大学にて言語学やドイツロマン派に関する講義などを受講した。その時期、リングもまたグーツムーツの『若者のための体操』に影響を受けており、ナハテガルの体操インスチチュートで体操に参加している。リングの特徴は、スウェーデン帰国後、ルンド大学にて科学的な、とくに解剖学および生理学的に「合理的」な身体運動の開発に取り組んだ、とされる点にあらう。最終的に1813年にはスウェーデン政府の協力のもと、ストックホルムに体操中央研究所 (Gymnastiska centralinstitutet<sup>12)</sup>) を設立し、その所長を勤めるに至る。中でも彼の発案した徒手体操においては、すべての動作がリーダーの指示に従い正しく行われなくてはならないとされ、それは特に教育学的に有効なものだとして、欧米でも広く評価された<sup>13)</sup>。

## 3. 「北欧的体操」：グロントヴィ主義と国民高等学校

こうしたスウェーデンの体操、つまりドイツに起源をもつ体操とは一線を画す北欧的な体操というものは、デンマークの民族主義的な国民形成が進展する際には、大きな意味合いを持つてくる。というのも、デンマークのナショナリズムは、一つには基本的にドイツを敵役とすることで形成されており、またもう一つには、それが「北欧主義 (スカンディナヴィア主義: Skandinavism)」を基盤としていたためである。北欧主義は、同じ北欧語に基づくデンマーク、

ノルウェー、スウェーデンを、民族を同じくする兄弟国とする思想である。ゆえに、これらの国々において、自国がドイツ語圏とは異なる北欧的な民族文化に根を張っているという言説は、自国民のアイデンティティを形成する上で大きな意味を持っていたのである。1849年の「第一次スリースヴィ戦争」(第一次シュレスヴィヒ=ホルシュタイン戦争)<sup>14)</sup>、および1864年の「第二次スリースヴィ戦争」(第二次シュレスヴィヒ=ホルシュタイン戦争)では、スリースヴィ(シュレスヴィヒ)とホルシュタインを不可分とするそれまでの伝統的な決定を無視し、アイダー川までをデンマークとする新たな国境線を主張したことがその要因となっているが、これも同様の思想が基本になっている。つまり、スリースヴィまではデンマーク語話者が多数派であるが、ホルシュタインはドイツ語話者が多いため、両国の境界はこの間に設定されるべきとする言語ナショナリズム的な思想である。そしてこうした主張を正当化させるためにも、デンマークが主張する国境線の内側では、ドイツ的ではない北欧的な文化(教育や教会の礼拝なども含む)の啓蒙運動が必要であったのである。その教育機関こそが、牧師グロントヴィ(N.F.S. Grundtvig: 1783-1872)の構想をもとに設立された国民高等学校(folkehøjskole)<sup>15)</sup>である。「デンマーク的な体操」という場合、その起源はこの国民高等学校の活動にその出発点を見ることができる。

国民高等学校は、北欧的な民族性への覚醒を主目的とした成人学校であるが、その主な対象は農民階級である。そして指導に当たった主要な国民高等学校教師は、多くがグロントヴィの思想に影響を受けた知識人階級であった。彼らはグロントヴィ主義者(Grundtvigian)といわれたが、その目的はロマン主義的な民族文化に基づいた共同体意識を農村に定着させていくことであった。彼らは当時の都市の文化を「ドイツ的」と考え、その影響を受けていない農村文化にこそ「デンマーク的」なものが残されているとしたのである。彼らは教育現場で書物(書かれた言葉)の影響を可能な限り廃し、田舎言葉とされるデンマーク語(話された言葉)を通じて「デンマーク的な」農民を育成した。そして他の欧州文化の影響が強い都市ではなく、「純粋な」文化が残る農村を原動力とする国づくりを目指したのである。

こうした国民高等学校において、体操は母国語と同様に、「純粋な」農民の自然な表現の一つと位置付けられ、身体には「北欧的」なシンボリズムが求められた。ここでは身体もまた、「ドイツ語圏」に対抗する「北欧」の表現なのであり、それは特に1864年の敗戦で南部デンマークがオーストリア・プロイセンによって「支配」されたことに対する、「デンマーク人のアイデンティティの確認」であったとヘニング・アイヒベルクは述べている<sup>16)</sup>。

国民高等学校での「北欧的」体操の導入は、19世紀後半に国民高等学校の中でも強いグロントヴィ主義的な影響力を持っていたヴァレキレ国民高等学校(Vallekilde Højskole)に始まる。1870年代からすでにグロントヴィ主義的国民高等学校においては体操が導入されていたが、同校の教師2名が、1882年にスウェーデンのストックホルムにて開催された体操祭でスウェーデン体操の影響を受け、以降はそれが国民高等学校におけるグロントヴィ主義的な体操文化の主流となった<sup>17)</sup>。翌年1883年には同校の校長エアンスト・トリーア(Ernst Trier: 1837-1893)がその体操を教育に導入している。また1864年の敗戦を受け、翌年新たな国境線付近に設立され「デンマーク的なものの砦」とも言われたアスコウ国民高等学校(Askov Folke Højskole)においても、スウェーデン体操は1884年以降に取り入れられ、同校の校長であるルズヴィ・スクレザ(Ludvig Schrøder: 1836-1908)、教師ポウル・ラクーア(Poul la Cour: 1846-1908)もスウェーデンにて体操の訓練を受け、本格的に同校における「北欧的な」体操を定着させていっ

た<sup>18)</sup>。

国民高等学校における体操の特徴については、二つの点を挙げるができる。一つは、身体を「北欧」に結び付けるシンボリズムである。例えばそれは、上記国民高等学校における体操場（体育館）に示される。デンマークで最も古い体操場（gymnastiksal）であるヴァレキレ国民高等学校の体育館（Øvelseshuset）はナショナルロマンティックスタイルの建造物として特徴的であり、色調はスウェーデンの民衆の建屋にインスピレーションを得ており、館内のレリーフには北欧神話の場面が描かれている<sup>19)</sup>。グロントヴィ主義的な国民高等学校において、体操場自体が「北欧人」としての形成のシンボルであった。もう一つは、体操自体が当時の農民の経済生活に結び付いていた点である。デンマークでは1882年に酪農協同組合（andelsmejeri）が設立され、その後協同組合運動は飛躍的に国内に広まっていった。その協同組合運動において、体操は構造的に結びついていた。オーヴェ・コースゴー（Ove Korsgaard）はその点について以下のように述べている。

「協同組合運動とグループ体操（holdgymnastik）のあいだには構造的に調和が存在し、それが農村で顕著になった。つまり、どちらの場合も〔個人の〕競争は抑制されるのである。集団の基盤は侵されてはならない。グロントヴィ的な自己理解においては、個人および集団における発展と義務のあいだにはバランスがある。協同組合の原則では、各人は所有する牛の数に関わらず必ず一票の権利が与えられる。グループ体操では同じように、能力や才能に関係なく一つの場所が与えられる。」<sup>20)</sup>

以上のように、19世紀後半のデンマークにあって、体操というのは単なる身体運動である以上に、国民高等学校を中心とする農民を主体とした北欧的な民族意識形成と結びついているのであり、また新しい近代的な農業経済生活とも構造的に結びついた身体的規律形成の手段でもあったのである。ただし、この時点ではまだ、体操というのはリング式体操（スウェーデン体操）であり、「デンマーク的な」体操というものは生まれていなかった。それが生じるのは、1920年代になってからのことである。

### Ⅲ ニルス・ブクの体操

本章では、「デンマーク的な」体操を打ち出し、それを世界的に知らしめることとなったニルス・ブクに焦点をあてる。ニルス・ブクについては、彼の没年である1950年に出版されたラスク・ニールセン（Rask Nielsen）による伝記が長く定番となっていたが、近年ではハンス・ボネ（Hans Bonde）が精力的にその内容をアップデートしつつ、特にその身体政治の観点からの分析を深めている<sup>21)</sup>。本稿におけるブクの情報の多くはボネの著作に依拠するが、本章では特にその身体をめぐる彼の民族主義的側面と、その受容のされ方に着目する。体操そのもののスポーツ科学的分析については、本稿では取り扱わない。

#### 1. ニルス・ブク略歴<sup>22)</sup>

ニルス・ブクは1880年7月15日に生まれた。両親は農民家系であったが、ニルスの生まれた数年後に前述のヴァレキレ国民高等学校に移り、父親はここで教師を務めている。つまり、ニ

ルス・ブクは特にグロントヴィ主義的伝統の強い環境で育ったということであり、またヴァレキレは前章で述べたように、国民高等学校の中でも農民に向けてリング式体操を最も早く取り入れていた<sup>23)</sup>。またこれもすでに述べたように、リング式体操はグロントヴィ主義的な啓蒙を身体で実践するものと言えるもので、ボネによれば当時、白い体操衣装に身を包んだ体操者は、農村における自立した男性で、かつ国の糧食を賄うという点で国の心臓部を担う愛国者を表すシンボルであった<sup>24)</sup>。こうした環境とブクの特性<sup>25)</sup>もあり、彼は16歳の時点ですでに地方のアソシエーションで体操を教えるほどになっていた。紆余曲折を経つつも、ブクは1912年にはストックホルム五輪でのデンマーク体操チームのリーダーとして選出されている。

こうして体操家としての頭角を示していたブクは、1920年、体操に特化した自らの国民高等学校を開設する。それがオラロブ体操高等学校（Gymnastikhøjskolen i Ollerup）である。現在の同校の公式サイトにおいても、ブクの体操はグロントヴィ主義の伝統と新しい体操形態を融合させたものと紹介されている<sup>26)</sup>が、重要な点は、このオラロブ体操高等学校自体が、リング式体操とは決別した新たな「デンマーク的な」体操の拠点として定着していったことである。そして同時に、それは国内だけでなく、日本を含む国外からも新たなデンマークのシンボルとして受容されていったことを示している。ブクは同校の生徒の中でも優秀とみなした「エリート」で遠征チームを組織し、幾度となく世界各国に「デンマーク的な」体操を披露してまわった。その時期と行先については、表2のとおりである。

表2. ニルス・ブクの国外体操遠征

北欧	スウェーデン	1923, 1930, 1937, 1940, 1949
	アイスランド	1927
	フェロー諸島	1927
	フィンランド	1929
	ノルウェー	1935, 1948
欧州	ベルギー	1920 (OLチーム), 1930, 1935, 1937, 1950
	オーストリア	1922, 1930, 1933
	ドイツ	1922, 1924, 1925, 1927, 1930, (ダンツィヒ 1931), 1933, 1936 (2回), 1938, 1950
	フランス	1924, 1937, 1950
	チェコ・スロバキア	1925, 1927, 1930
	オランダ	1927
	英国	1927, 1937
	ハンガリー	1930, 1933
	ポーランド	1937
	イタリア	1934
	ポルトガル	1938
欧州外	米国	1923, 1926, 1931, 1939
	カナダ	1931
	ソビエト連邦	1931
	中国 (満州)	1931
	韓国	1931
	日本	1931
	ブラジル・ウルグアイ ・アルゼンチン	1938
	南アフリカ	1939

【出典】 Bonde (2006), p.81より筆者作成

このように、ブクはグロントヴィ主義を背景とした「デンマーク的な」身体論の創造者でありつつ、またそれをもって世界に同国を発信することに成功した人物であるといえる。それは同時に、他国がそれぞれの国の関心をもってブクの体操を受容したということでもある。なかでも、ブクの体操を最も称賛した国、そしてブク自身も好意的かつ積極的にネットワークを構築した国とは、ドイツと日本であった。ブクはナチズムに対して強い共感をもっており、ナチス・ドイツにおける帝国スポーツ指導者 (Reichssportführer)、ハンス・フォン・チャマー・ウント・オステン (Hans von Tschammer und Osten: 1887-1943) とともに強いつながりを築いて、1936年にはヒトラーとも面会している<sup>27)</sup>。ゆえに、ブクの「デンマーク的な」身体論を整理するためには、彼の体操原理そのものよりも、ブクが身体を通じて表現しようとした「比喩的なもの」の想像力、また他国のブクの体操の受容のされ方にこそ、着目する必要がある。本稿は3章にて、特に日本での受容につき取り上げる。

## 2. ニルス・ブクの体操とは

ブクがリング体操とは異なる独自の「デンマーク的な」体操を模索し始めたのは、1912年のストックホルム五輪以降とされる<sup>28)</sup>。ではなぜブクはスウェーデンのリング体操を離れ、「デンマーク的な」体操へと移ったのか。その基本思想とはどのようなものか。ブク自身による体操の教科書、『デンマークの基本体操 (Dansk Primitiv Gymnastik)<sup>29)</sup>』(第3版、1936年刊行)では、以下のように語られている。

まず、体操の目的とは、健全な魂の住処としての健全で美しい身体を求めることとされ、デンマークにおいてそうした体操に対する関心が高まったのは、デンマークの国民高等学校のおかげであるとする。そのうえで、リングにおける合理的な体操理念は正しいとしつつも、その理念を体現したスウェーデンの体操については、デンマークの若者の体操に対する意欲と感心を満足させてこなかったと批判する。その主な理由は、スウェーデンの体操において手段が目的となり、「システムのため」の運動となっているためだとする。それに対しブクの体操とは「人間のため」の運動であり、本来の調和的な身体形成が人間に与える高尚な感覚を失うことなく、精神力と運動力がともに完全に目標を達成するよう日常に還元されるべきである、とされる。ではそうした「人間のため」の運動とは、具体的にはどういうものか。それは、若者に広くみられる骨格の硬直からなる体の歪みなどを取り除く運動であり、そのためには柔軟な筋肉を鍛え、神経と筋肉の間の連携を高めることが求められるとし、それが基本体操の基盤であるとする。スウェーデン体操における硬直した動作や姿勢は、こうした基本体操の自然な運動リズムによって取って代わられるとし、それはあらゆる不幸な精神と心の問題を取り除くであろうとする<sup>30)</sup>。

ここで重要なのは、彼が考える体操の合理性が、姿勢の歪みを矯正するという点を重視し、骨格、筋肉、神経という3点に着目している点である。だが、なぜ姿勢の歪みを矯正することが、リング体操にかわる「合理性」につながるのか。ボネは、1915年のオラロブ国民高等学校年鑑に掲載された以下のブクの体操論を引用し、「基本 (primitive) 体操」の基盤を理解するに際しては、彼自身の「原始的 (primitive)」な人々の肉体に対する理想化を、その背景に見て取るべきであると指摘する。

インディアンの首長やその部族のメンバーの中には、背中が曲がっていたり、頭が垂れ下がったり、足が曲がっていたり、鈍くぎごちない動きをするような者は見当たらないだろう。もしそうしたタイプの人間を見たければ、それは我々自身に目を向けなければならない。インディアンは、そしてまた我々の祖先たる古代北欧人もまた、強く鋭い心身能力を有し、背筋はまっすぐで、強靱で、柔軟な体を持つ人々であった。彼らは自らを守り、自らを養うことができたのである<sup>31)</sup>

つまり、人々が失ってしまった「原始的身体」、(当時は「原始人」と映っていた)インディアンや古代北欧人がかつて有していた「身体的特徴」を取り戻すこと、これである。実際、国民高等学校の体操とは農民を対象とし、その当時の農民たちは日々の農作業にて肉体を行使していたため、体が曲がったりゆがんだりする者も少なくなかった。ブクはそれを本来の「原始的人間」にはなかった身体的な「欠陥」であると考え、それを除去することで「本来の」農民の肉体を復興させることを模索したのである。そしてその体操的特徴は、スウェーデンのリング体操は「女性的 (feminine)」なりズム運動であるのに対し、ブクの体操はそれに加え、強靱で柔軟かつ整った肉体という「男性性 (masculinity)」を特に付与したものであるとされる<sup>32)</sup>。そしてそれは、都市における勝ち負けを競う「スポーツ」やアルコール漬けになった青年などに対置され、より「進歩的」で「解放的」な身体運動とされたのである<sup>33)</sup>。

### 3. オラロブ体操高等学校のシンボリズム

ブクの体操思想を特徴づける身体的理想が、「原始的身体」の復興にあること。それはグロントヴィ主義が古北欧に北歐文化の起源を求め、その覚醒を教育の基本的理念としたことと並行している。そして、グロントヴィ主義にあつては、北歐とは、古代ギリシアやローマ文明を継承する次世代の新しい民族であるという考えが存在していた。そうしたシンボルは、オラロブ体操高等学校に広く見ることができる。

例えば、古代ギリシアの身体的な連続性を示すシンボル性は、それをもって民族の優秀性を表現することは欧州では珍しくない。その点ではオリンピックのイデオロギーも、ドイツのヤーンにおける体操運動でも、チェコのソコル運動でも同様であった。ブクの学校においても、館内には古代ギリシア人の若者の彫像が配置され、体育館にも全裸の若いギリシア人兵士の絵画が描かれていた<sup>35)</sup>。また、同校の野外運動場には7つの方向に向けて巨大なコンクリートのモニュメントが設置されている。これは、それぞれエルサレム、アテネ、ローマ、パリ、ニューヨーク、ロスアンゼルス、そして「ユートピア」のシンボルとなっている。このシンボルが示しているのは、アメリカの2都市を除くと、キリスト教的な起源、そしてギリシア=ローマ文明、欧州文明であり、これらは西洋文明それ自体の継承を意識したものである<sup>36)</sup>。これらは身体を通じたキリスト教的西洋文明の「正統性」を、ブクの体操およびオラロブ体操高等学校に暗示するものであろう。

だがそれ以上に特徴的と言えるのが、同校の室内プールである。この室内プールは、1926年に設置されたもので、欧州でも最も早くに設置されたものである。このプールの特徴は、ローマの公衆浴場をモチーフとしたデザインを施されているが、興味深いことに、そのプールの入り口足元には、モザイク様式で「卍」が描かれている。これはナチス・ドイツのシンボルであるハーケンクロイツとは逆向きの（ハーケンクロイツ自体が逆卍なのではあるが）形であるが、1926



年という時代にあつてこのシンボルが民族主義的な意味を帯びていたことは明確であろう<sup>37)</sup>。

#### 4. 海外における受容

すでに述べた通り、ブクはオラロプの「エリート」チームを引き連れ、数々の国外遠征をおこなった。その「エリート」チームには、ブロンドの髪と青い目という「ノルディック・クオリティ」を持つものが特に選ばれた<sup>38)</sup>とされるが、ブクは1923年の米国遠征では特にその農村的背景や農民性を強調<sup>39)</sup>し、また現地では彼の目的が「完全なる身体」「完全なる人種」の創造にあると報じられていた<sup>40)</sup>。

他方、ブクの遠征が単なる興行ではない点は、この遠征チームが当時の米国大統領カルヴィン・クーリッジ（Calvin Coolidge）に公式に迎え入れられたという点に見てとれる。ここでは100名を超える退役軍人も観覧に参加したとされ、ホワイトハウスとワシントンモニュメントの間の芝生上で行われたブクの体操には約10000人もの人が見学を訪れたという<sup>41)</sup>。この点で見逃せないことは、この時代にあつて体操は特に軍人との結びつきが強かったこともあり、その影響力は大統領すら動かすほどの政治力を持っていたということである。

ここから、ブクの体操の海外遠征がこれほど多く行われていること背景には、当時にあつて、体操とその民族性言説は、単なる友好関係上の交流である以上に、外交的道具の一つでもあったことも関係しているといえる。それは日本の場合にあつても同様であった。

### IV 日本における受容

#### 1. 日本遠征概要

ブクの遠征チームは、1931年に来日した。その様子は石橋哲成によってまとめられており、その概要は以下の通りである<sup>42)</sup>。

ブクの来日については、玉川学園創立者の小原國芳（1887-1977）が中心となって招聘したものである。小原は実際に1930年から翌年にかけての欧州行脚の際、オラロプを訪ね、そこに2週間滞在しブクの体操を目の当たりにし、日本へ来るよう依頼した、とされている。一行は1931年9月8日に東京に到着し、都内の表敬訪問を経て9月13日に玉川学園での実演を皮切りに、成城学園、自由学園<sup>43)</sup>等でも実演が行われた。遠征自体は、福島、秋田、富山、金沢、福岡、神戸、大阪、岡山、米子、名古屋、静岡、横浜といった都市を周り、10月15日の首相官邸の芝生上での公演で全日程を終了したとされる。ボネによれば、公演は日比谷公会堂でも行われ、2500人が観覧した。また2名の皇族も体操を観覧しブクと言葉を交わしたとされ、首相官邸での公演は、当時の首相若槻礼次郎とその閣僚に対する限定公演だったという<sup>44)</sup>。また石橋によれば、ブクの来日を機に、玉川学園内には「オレロップ国民高等体操学校東洋分校」が設けられ、玉川学園内はもとより、要望があれば全国各地で「デンマーク体操」を指導したとされる<sup>45)</sup>。くわえて、海軍や航空隊、商船学校、鉄道省などでもデンマーク体操が取り入れられ、1932年に創案された「ラジオ体操」（第二）も、その原型はデンマーク体操をもとに作られた、とする。

#### 2. 日本遠征とその背景

上記の概要からブクの遠征が日本・デンマークの友好関係構築のみならず政治的・外交的な意味合いも有していたことがわかる。だが他方でいくつかの疑問点も生じてくる。第一に、そ

もそもなぜ小原はブクを招聘したのか。何より、これほど大規模で外交にも関係する遠征が、小原のオラロブ訪問から1年も経たずに実現したのは無理があるように思える。第二に、なぜこれほどの全国公演ができたのか。石橋は「もとより科学的にも、医学的にも、解剖学的にも裏付けられた優れた体操であったので、日本各地で好評を博するのは当然のことでした」とするが、その説明には疑問が残るであろう。

一つ目については、ボネの記述からある程度明らかとなる。理由の一つは、すでに1928年の時点で、在京のデンマーク外交団が積極的にブクの訪日をアレンジしていたという点である<sup>46)</sup>。つまり、この1931年の遠征は延期を経て実現したものである。延期の理由としては、当時の世界情勢、特に日中関係の悪化が少なからず影響を及ぼしたとされるが、その過程の中で、ブクは中国での公演も希望するようになったという。それに対し日本側は満州や韓国への遠征を主張し、遠征計画の背景では大変な外交的やり取りがあった。そうした情勢の中で、ボネによれば、小原が訪日にかかる経済保障に加え、韓国および中国での交通費および諸費用の提供を決定した、としている<sup>47)</sup>。そのうえで、文部省の派遣により欧米で体操を学び、デンマーク留学中にオラロブにも滞在経験のある三橋喜久雄（1888-1969）を通じ、ブクは小原からの招聘を受けたとされる。ここから、同年の小原の直接のオラロブ訪問時点ですでに遠征は決定されていたとみることができよう。このように、この遠征は当時の国際情勢に絡む外交戦略的な思惑も多分に絡み合っていた。

### 3. 「デンマーク体操」をめぐる想像力

しかし、それでも疑問は残る。なぜ在京のデンマーク外交団はブクの訪日を積極的に計画していたのか。またそれは二つ目の疑問にもつながるが、なぜ日本側でもこれほどの全国的な受け入れが可能であったのか。一つの要因としては、すでに日本側において「デンマーク体操」への認識と関心が高まっていたからではないか、と考えることができる。そう考える理由は、上記石橋も記している平林廣人（1886-1986）の存在がカギである。平林は単なる「デンマーク研究者」である以上に、日本における農村発展と国民高等学校をめぐる言説上において、極めて重要な人物なのである。平林はヴァレキレ国民高等学校に滞在し、そこでフィルムに収めた体操を1925年に人々に紹介したとされる。だが1923年に愛知県碧海郡にて行われた「農村文化講習会」では、すでに講演のあい間に「デンマーク体操」が行われていたとする記録がある<sup>48)</sup>。この講習会は、東京帝国大学教授の矢作栄蔵（1870-1933）、那須皓（同教授）、愛知県立農林学校校長の山崎延吉（1873-1954）などが参加し、彼らはいわゆる「農本主義者」として知られている。もともとデンマークの国民高等学校は、1913年に上述の那須皓が翻訳したホルマン（A.H. Hollmann：1876-1936）『国民高等学校と農民文明』を通じ、日本においてすでに知名度を有していた。そして彼らが農本主義言説において範として注目していたのが、国民高等学校とグロントヴィであった<sup>49)</sup>。彼らはそれらを日本における農民育成への参考となるものと考えたのであり、このことは加藤完治（1884-1967）などの日本各地および満州や台湾にまで及ぶ「国民高等学校」運動へとつながっていくのである<sup>50)</sup>。

平林廣人は、まさにそうした背景の中にあって、1924年からデンマークに滞在し、現地の農政事情を調べ、また国民高等学校などを訪問し、その体験に基づいた知識をもって帰国後に農村文化協会理事を務めていた人物である。平林の著書である『農民の國デンマルク』（1924年）においても、「都市文明から独立して、現代の農村文化の樹立を確証したものはデンマルク人

である」とし、日本に対しては「由来瑞穂の國と自ら讃し、農本國と自ら恃む我東洋の天國日本に農村文化の確立を世界に宣揚しえるものありや」<sup>51)</sup>とする。日本はデンマークから農村文化の何たるかを学ぶべきであり、それに際して同国の国民高等学校やグロントヴィは、その模範であるとするのである。また、平林はその中でも内村鑑三の『デンマルク国のはなし』におけるダルガスの「国外に失ったものを、国内において回復すべし」を引き合いに出し、「雄渾なるスカンヂナビヤ民族の男性的国民精神の復興を策立し更に一步を進めて、前述の如く都市集中文明の潮光を轉じて、大自然の懐—農村の文化—へ人類の復興を指導せんとする大文化運動の先達者たるの資格を享有するに至つた<sup>52)</sup>」とする。このように、デンマークとグロントヴィ、そして国民高等学校は、当時の農本主義者において、農民の規律化による民族意識の高揚と分かちがたく結びついていた。そして民族主義的国民観や農民文化の発展に関する言説は、今回の遠征に際して玉川学園が発刊した『ニルス・ブック氏を迎へて』という小冊子にも垣間見ることができる。同小冊子では、ブックを招く理由として、以下のように述べている。

活動自在なる四肢、巧緻微妙なる筋肉が人生々活の武器であることは云ふまでもないが、元来この點に於て世界各國民に優越して居る吾々日本人は、飽くまでその長所を伸ばすと共に、身体各部の強堅にして且つ調和的なる發達を圖り、依て得たる體力を更に精神の上にまで及ぼし、所謂「健全なる精神は健康なる身體に宿る」の域に達せねばならぬ。蓋し身體教育と雖も各個人各民族の個性傾向を度外視してなされるものでなく、たとへ到達する地點は同一であつても、其のスタートがおの／＼相異なるは寧ろ當然である、即ち日本人には日本人特有の體育法がなければならぬのであるが、それと同時に諸外國のすぐれた體育家乃至體育法に接觸して、これを研究し消化し、以て自己啓培の滋養としなければならぬ<sup>53)</sup>。

そのうえで、ブックの体操がデンマークにおいて老若男女問わず受け入れられているとし、そのように「民衆の國家的社會的自覺が完全にその體育的自覺と一致」しているという点から、それに学ぶべきとするのである。そして以下のように述べる。

ブック氏の體操は、その名の示す如くプリミチヴ・ギムナスチクス即ち最も原始的、基礎的、根本的のものである。而して夫れは此體操が世界一の農業國と云わる、丁抹に成長したと云ふ事實そのものと、切離す事の出来ない關係を有つて居る。即ち一言にすればブック氏の體操は農村の爲の體育法である。それは農民の生活に芽生え農村を温床として育つたものである。ブック氏一行は、その體操と共に彼國の郷土舞踊をも持つて来るのであるが、これら異郷の、併しながら多分に生活の事情を同じうする環境に育まれた農村體育乃至藝術から、われ／＼は想像以上に多くのものを収穫し得るであらう<sup>54)</sup>。

また、同冊子ではグロントヴィの言及も忘れてはいない。ブックに関する紹介文では、以下のように記述される。

列強の間に介在して、土地は奪はれ勢力は沮まれ、常に廿日鼠の如く恐怖におびえつゝあつた北歐の一小國丁抹が、一躍して世界注目の的となり、深刻なる愛國心と勤勉なる努力と、周到なる産業と、一人當りの富が世界一と云はるゝ財力とを有するに至つたのは、そも何人

の賜であるか、いふまでもなく丁抹中興の祖グルンドウィの偉大な功績に歸せねばならぬ。

ブック氏の父は、グルンドウィの思想を承けた憂國の士であり、又國民學校の教師をも勤めた人である。氏はこの父の血と感化とを享け、更に絶えざる修養を積んで、今日の如く第二のグルンドウィと云わるゝやうになつたのである<sup>55)</sup>。

このように、ブックの体操は当時の農本主義者の想像力を通じ、農民の「国家社会的自覚」へと結びつき、それはシンボルとしてのグロントヴィに還元される。そしてそこでブックは「第二のグロントヴィ<sup>56)</sup>」という象徴を帯びるのである。つまり、ブック自身が自らの体操を、グロントヴィ主義の影響から、民族主義的農民像という想像力をもって構築したように、日本側も同様のものを求めて「デンマーク体操」を受容した、という関係が見て取れるのである。

ブックの遠征の2年後である1933年、黒澤西蔵(1885-1982)はデンマークの農業を範とする北海道酪農義塾を設立した<sup>57)</sup>。これが後の酪農学園大学であるが、黒澤は「私は偉人グルンドヴィにならい、日本再建の祈りを込めて、三愛主義をもって酪農学園の精神とした……」と述べている。また翌年1934年、松前重義(1901-1991)はデンマークに渡り国民高等学校を視察している。そして、帰国後の1936年、それを範とした望星学塾を東京に設立するが、それが現在の東海大学となる<sup>58)</sup>。このように、1920年代から1930年代初頭にかけての日本において、「デンマーク」を代表する農業、国民高等学校、グロントヴィは、単なる遠い異国ではなく、それは理想的な国家形成という想像力を喚起させる強力なシンボルであったのである。この時代において「デンマーク体操」は、そうした想像力をパフォーマティブに表現するものとして受容されたといえるだろう。

戦後、「デンマーク体操」は消えることなく玉川大学や東海大学、自由学園などを中心に継承されていき、玉川大学にはブックの銅像も2011年に設置されている<sup>59)</sup>。だが、そこには戦間期における農民育成を通じた国家形成などといった言説的要素はすでに残っていない。継承されているのは、体操それ自体と、グロントヴィやダルガスをシンボルとして物語られる牧歌的な「グロントヴィ神話」や「ダルガス神話」<sup>60)</sup>のみである。

## V 結語

本稿では、デンマークにおける体操理念のパフォーマティブな想像力として、グロントヴィ主義的な農民観が大きな意味を持つことをのべ、またその想像力自体が日本における体操受容の背景であることを提示した。だが議論すべきことはまだ多く残されている。その一つは、ブックのナチズムとの関係性である。彼がナチズムに対してシンパシーがあったのは確かであるが、同様にナチス・ドイツにおいても、ブックの体操は魅力的なものであり、それはナチの教育システムに導入されるほどであった。

何よりも、基本体操(primitive gymnastics)の実践者は、どんなにその運動が激しいもので身体に危険をもたらしうるものと感じられても、彼らの指導者の意思に従い、彼を疑うことなく信頼することとされた。そのメソッドは、ナチの決まり文句「あなたの身体は国民に帰属する」のごとく、権威への信頼を創出する基礎を作り出すことができたのである<sup>61)</sup>。

このように、ブクの体操における身体的規律化の側面は、ナチス・ドイツがそれを好意的に受容した理由の最たるものである。それに対し、ブクにおいて、そうした規律化の最終的な目的は、システムとしての国家に対する規律化ではなく、想像力としての農民的民族性に対する規律化にとどまっていた。だがそれでも、その民族観の評価はより深く行われるべきであるのは当然であり、日本における「デンマーク体操」およびブクの称賛的・牧歌的受容そのものもまた、考察の対象になりえるだろう。さらにいえば、日本でも好意的に受容されているグロントヴィ主義そのものの評価に関しても慎重であるべきであろう。ボネにおいてすら、グロントヴィに起原を持つデンマーク語の「民族性」や「国民性」を意味する“Folkelighed”を、“democratic national sentiment”と意識し、その特徴を「民主主義的」なものとして擁護しているのである<sup>62)</sup>。それは妥当な解釈かどうか。少なくとも、国民形成過程にあってグロントヴィ主義や国民高等学校をシンボリックに受容してきた日本にあって、それを問うことは一つの歴史的義務といえまいか。

#### 註

- 1) トゥルネンの社会的影響については、有賀 (1998) を参照のこと。
- 2) ソコルについては、福田 (2002)、福田 (2006) を参照のこと。
- 3) 福田 (2002)、40頁。
- 4) モッセ (1994)、143頁。
- 5) 多木 (1995)、75-76頁。
- 6) cf. Naul (1998),
- 7) ナハテガルについては、Bjergによるデンマーク人物事典の項および Nielsen (2005) p.38 を見よ。
- 8) ルソー『エミール』とグーツムーツの関連については、坂入 (1987) p.23-32.を参照。
- 9) Eichberg (1995), p. 109.
- 10) Bjerg, ibid.
- 11) リングについては、Melnick (2015)、頼住 (2013)、Ringling og Trangbækによる大デンマーク事典の項などを参照。
- 12) 現在のスウェーデン体育大学 (Gymnastik- och idrottshögskolan / The Swedish School of Sport and Health Sciences)
- 13) また、補助器具として肋木を開発導入したのも、リング式体操の特徴であり、これは19世紀を通じて欧米を中心に広まったものである。
- 14) 「スリースヴィ戦争 (Slesvigske Krig)」はデンマーク側の表現 (3年戦争: Treårskrigenともいわれる) で、ドイツ側では「シュレスヴィヒ=ホルシュタイン戦争 (Schleswig-Holsteinischer Krieg)」と言われる。本稿では併記しつつもデンマーク語を優先した。
- 15) 国民高等学校 (folkehøjskole) とは、成人を対象として国民教育を行う私立の教育機関であり、1844年に南ユラン地方のレズィング (Rødning) に最初の学校が設立され、1864年の敗戦後には全国で学校数を増やしていった。現在でも成人教育機関として数多くの学校が運営されている。
- 16) アイヒベルク (1997)、48頁

- 17) Korsgaard (1982), s. 82.
- 18) ラクーアの本来の専門は物理や数学といったいわゆる「科学」であり、世界で初めて風力発電を発明したのも彼である。その発電用風車はアスコウ国民高等学校内に設立されたものである。田淵 (2009) を参照。
- 19) cf. Fredede og bevaringsværdige bygninger, Slots- og Kulturstyrelsen ([https://trap.lex.dk/Vallekilde\\_H%C3%B8jskole,\\_H%C3%B8rve](https://trap.lex.dk/Vallekilde_H%C3%B8jskole,_H%C3%B8rve))
- 20) Korsgaard (1982), op.cit., s.92. イタリックは原著から。[ ] 内は著者。
- 21) cf. Nielsen (1950); Bonde (2003); Bonde (2006).
- 22) なお、上記のBonde (2006)には映像資料が同封されており、その映像にはブクの生涯や体操の映像、日本を含む当時の遠征の様子などが収められており、非常に重要なアーカイブとなっている。また、同資料は英語、デンマーク語に加えて日本語でも解説がなされている。
- 23) Bonde (2006), p. 21.
- 24) Bonde, op.cit., p.25.
- 25) ブクは同性愛者であり、そのことは彼が体操に没入するに際しての大きな要因であったとされる。その点はボネの上掲書にて詳細に論じられているが、本稿では割愛する。
- 26) Gymnastikhøjskolen i Ollerup “Historie og baggrund” <https://ollerup.dk/om-ollerup/formal-amp-vaerdigrundlag/historie> (2021年10月1日閲覧)
- 27) ナチズムとの密接な関係は、Bonde, op.cit., pp.127-296を参照せよ。またヒトラーとの面会についてはp197-198.
- 28) 同五輪ではデンマークは体操で第2位の成績に終わり、それはブクがリング体操に数々の変更を施したからではないかとボネは推測している。Bonde, op.cit., p.27.
- 29) Bukh (1936)
- 30) Bukh, op.cit., s. 7-10.
- 31) Bonde, op.cit., p.30. (Yearbook for Ollerup Folkehøjskole, 1915). なお、ここでのオラロプ国民高等学校とは、1882年に設立された国民高等学校で、ブクの体操高等学校はここから体操に特化して枝分かれしたものである。
- 32) Bonde, op.cit., p.35.
- 33) すでに述べたように、本稿ではブクの体操のスポーツ科学的分析には言及しない。だが一点、ブクが生涯にわたって医者やスポーツ生理学者から抵抗にあっていた、ということは指摘しておいてもよからう。ボネによれば、ブクの体操は医学的見地から見ると、個人の身体に合わせてデザインされたものではないという問題があった。特にブクの柔軟体操は、強靱な肉体を持つ農民には問題なかったが、子供や体つきが良くないものには極度に激しいものであったとされる。だがブクはそうした医師の指示には耳を貸さない傾向があったという。上記Bonde, op.cit., p.36. and p. 42を参照。
- 34) 多木、上掲書、52-66頁。チェコのソコルがギリシアを理想としてシンボル化している点については、福田 (2006) を参照。ところで、福田によれば、チェコのソコルでは、体操者は互いに親称 (ty) で呼び合うという風習があったという (同書3頁)。それはオラロプでも同じであった。ボネによれば、ブクが生徒に敬語の「あなた (De)」で呼ばれた際には、「まだ私は親称 (du) で呼ばれるに足らないかね」と返したという。Bonde, op.cit, p. 65.

- 35) Bonde, op.cit. p.46. なお、現在オラロプの野外に設置されている7体のギリシア彫刻は、ニューカールスバーグ財団より寄付され2007年に設置されたものである。Damkjær og Finnerup (2007) s.15.
- 36) Damkjær, Camilla og Finnerup, Simon, op.cit. s.19.
- 37) これについては、筆者がオラロプ体操高等学校にて聞き取りを行った際、これはナチズムが政権についた前に作られたものであるからナチズムとは関係ない、という説明を受けた。たしかに「ナチズム」そのものではないのは事実だが、その民族主義的な起源のシンボル化という点では、むしろナチズムとの共通性を示すものと言わざるを得ないだろう。この点についてボネは、グロントヴィ主義的な北欧神話の表現として取り入れた可能性があるとしつつも、卍がほかの国民高等学校で使われていた形跡はないため、やはりそれはナチズムに対するブクのシンパシーが関係しているのではないかとしている。Bonde, op.cit. p. 94. 室内プールおよび「卍」の写真については、Damkjær, Camilla og Finnerup, Simon, op.cit. s.10-11を参照せよ。
- 38) Bonde, op.cit. p. 130.
- 39) Bonde, op.cit. p. 83.
- 40) *ibid.*
- 41) Bonde, op.cit. p. 84.
- 42) 石橋 (2011)
- 43) 早野 (2021) によれば、自由学園を創設した羽仁もと子 (1873-1957) もまた、この遠征時にブクの「体操に感激するとともに理念に共感し、自由学園の身体運動に取り入れることにした」とされ、また、もと子自身もオラロプを見学に訪問しているという。早野 (2021)、121-122頁。また戦後には、同校卒業生の羽仁淳が1961年に『デンマーク体操』を出版しており、これは当時の教科書的存在となったといえるだろう。羽仁 (1961) を参照。
- 44) Bonde, op.cit., p.118. なお上記映像資料の日本語ナレーションでは、この皇族は「皇太子」と紹介されているが、その表現が正確かどうかは検証が必要であろう。
- 45) 1931年には、玉川教育研究所の翻訳でニルス・ブック著『基本体操』も出版されている。ブック (1931)。
- 46) このあたりについてはBonde, op.cit., pp. 103-106.
- 47) *ibid.* またボネは、「小原は明らかに、中国で公演をしようとするブクの努力に不安を抱いていた」としている。
- 48) 村井 (2006)、91頁参照。
- 49) 加藤をはじめとする当時の農本主義者におけるデンマーク理解およびグロントヴィ言説の語られ方については、田淵 (2008) を参照のこと。
- 50) 日本の国民高等学校運動については、宇野 (2003) を参照。また愛知県安城におけるデンマークと農民の自立文化の関係については、岡田 (1992) を参照。
- 51) 平林 (1924)、17頁)
- 52) 同上、6頁。
- 53) ニルス・ブック研究会 (1931)、1-2頁
- 54) 同書、5頁
- 55) 同書、11-12頁

- 56) ブクを「第二のグロントヴィ」と呼んだ人物が誰かはわからないが、少なくとも一般的にはそのように認知はされていない。
- 57) また、後に酪農学園と交流があり、協同組合主義の社会構想を描いた賀川豊彦（1888-1960）もまた、「グロントヴィの精神」に倣い、デンマークの国民高等学校を日本で実現しようと尽力した人物である。詳しくは、斎藤（2019）227-230頁を参照せよ。
- 58) 東海大学ウェブサイト（<https://www.u-tokai.ac.jp/about/philosophy-history/matsumae-spirit/I>）および「望星学塾の歩み」（<https://www.bosei.tokai.ac.jp/about/philosophy/>）より。ともに最終閲覧2021年10月20日。
- 59) 玉川学園の歴史より。（[https://www.tamagawa.jp/introduction/enkaku/history/detail\\_4523.html](https://www.tamagawa.jp/introduction/enkaku/history/detail_4523.html) 最終閲覧2021年10月20日）
- 60) 「ダルガス神話」という言葉については、村井(2014)を参照せよ。なお、村井は、「フォルケ・ホイスコーレ賛美の我が国での文脈で“グロントヴィとダルガス”というデンマークには存在しない独特の“セット”が語られだしていった…」(村井:2014, 406頁)とし、1930年代以降のこうした言説が日本独自の定型句として浸透していたとしている。
- 61) Bonde, op.cit. pp. 204-205.
- 62) Bonde, op.cit. p. 15.

#### 参考文献

- (1) アイヒベルク、ヘニング(1997)『身体文化のイマジネーション—デンマークにおける「身体」の知』(清水諭、訳)、新評論
- (2) アンダーソン・ベネディクト(1997)『増補 想像の共同体』(白石さや・白石隆、訳)、NTT出版
- (3) 有賀郁敏(1998)「19世紀ドイツにおける結社研究の構想—1848/49年革命と『トゥルネン協会(Turnverein)』」『立命館大学産業社会論集』34(2)、71-87頁
- (4) 石橋哲成(2011)「小原國芳の健康教育とデンマーク体操—ニルス・ブッカー一行の招聘から80年目にあたりて—」『玉川学園・玉川大学体育・スポーツ科学研究紀要』第12号、21-27頁
- (5) 宇野豪(2003)『国民高等学校運動の研究—一つの近代日本農村青年教育運動史』溪水社
- (6) 岡田洋司(1992)『ある農村振興の軌跡—「日本デンマーク」に生きた人々』農山漁村文化協会
- (7) 黒澤西蔵(2020)「付二 酪農学園の建学精神—三愛主義とは何か」『酪農学園の創立—黒澤西蔵と建学の精神』酪農学園大学、69-74頁([https://gakuen.rakuno.org/wp-content/themes/rgu-rel/file/spirit\\_03.pdf](https://gakuen.rakuno.org/wp-content/themes/rgu-rel/file/spirit_03.pdf) 最終閲覧2021年10月20日)
- (8) 斎藤弥生(2019)「賀川豊彦とスウェーデン・デンマーク：戦間期の北欧を見た日本人」『IDUN—北欧研究—』23、225-236頁
- (9) 坂入明(1987)「ルソーと汎愛教育派について—その身体教育論を中心にして」『東京家政大学研究紀要』第27集、23-32頁
- (10) 多木浩二(1995)『スポーツを考える—身体・資本・ナショナリズム』、ちくま新書
- (11) 田淵宗孝(2008)「グロントヴィ論とフォルケホイスコーレ論の再検討」『社会文化研究』



第10号、86-106頁

- (12) 田淵宗孝 (2009) 「風力発電 —現代デンマークのナショナル・シンボル」『デンマークを知るための68章』(村井誠人、編) 明石書店、260-264頁
- (13) ニルス・ブック研究会 (1931) 『ニルス・ブック氏を迎へて』 玉川學園出版部
- (14) 羽仁淳 (1961) 『デンマーク体操』 体育の科学社
- (15) 早野曜子 (2021) 「デンマーク・オレロップ体育アカデミーと自由学園の交流 (その1) —学校設立と交流の歴史—」『生活大学研究』 Vol.6, 118-128頁
- (16) 平林廣人 (1924) 『農民の國デンマルク』 文化書房 (国立国会図書館デジタルコレクション、info:ndljp/pid/972142)
- (17) 福田宏 (2002) 「チェコにおける体操運動とネイション—ナショナル・シンボルをめぐる闘争—」『東欧史研究』 24号、27-47頁
- (18) 福田宏 (2006) 『身体の国民化 —多極化するチェコ社会と体操運動』 北海道大学出版会
- (19) ブック、ニルス『基本體操』(玉川教育研究所訳)、玉川學園出版部
- (20) 村井誠人 (2006) 「「日本のデンマーク」安城に見る我が国の海外文化の受容に関する一考察」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』 第4分冊51. 87-112頁
- (21) 村井誠人 (2014) 「彼我を視野に据えての「ダルガス神話」成立の再考」『IDUN—北欧研究—』 vol.21、387-410頁
- (22) モッセ、ジョージ・L (1994) 『大衆の国民化 —ナチズムに至る政治シンボルと大衆文化』(佐藤卓己・佐藤八寿子、訳) 柏書房
- (23) 頼住一昭 (2013) 「スウェーデン体操における「自然的方法」の我が国への導入過程に関する一考察」『スポーツ健康科学研究』、35: 75-87頁
- (24) Bjerg, Hans Christian: *Franz Nachtgall* i *Dansk Biografisk Leksikon* på lex.dk. Hentet 27. september 2021 fra [https://biografiskleksikon.lex.dk/Franz\\_Nachtgall](https://biografiskleksikon.lex.dk/Franz_Nachtgall);
- (25) Bonde, Hans (2003): *Kampen om ungdommen - Niels Bukh en politisk biografi*. Museum Tusulanums Forlag.;
- (26) Bonde, Hans (2006) *Gymnastics and Politics - Niels Bukh and Male Aesthetics*. Museum Tusulanums Forlag.
- (27) Bukh, Niels (1936) *Dansk Primitiv Gymnastik*. 3. udgave, H.Hagerup Forlag, København.
- (28) Damkjær, Camilla og Finnerup, Simon (2007) : *Kunst og arkitektur på Gymnastikhøjskolen i Ollerup*. ([https://ollerup.dk/application/files/6814/9449/5006/Kunstfolder\\_DK.pdf](https://ollerup.dk/application/files/6814/9449/5006/Kunstfolder_DK.pdf)、最終閲覧日2021年10月20日)
- (29) Eichberg, Henning (1995): "Body Culture and Democratic Nationalism: 'Popular Gymnastics' in Nineteenth-Century Denmark", in *The International journal of the history of sport*. 12 (2), pp.108-124.
- (30) Fredede og bevaringsværdige bygninger, Slots- og Kulturstyrelsen: Vallekilde Højskole, Hørve i Trap Danmark på lex.dk. Hentet 9. oktober 2021 fra [https://trap.lex.dk/Vallekilde\\_H%C3%B8jskole\\_H%C3%B8rve](https://trap.lex.dk/Vallekilde_H%C3%B8jskole_H%C3%B8rve)
- (31) Gymnastikhøjskolen i Ollerup ” Historie og baggrund” <https://ollerup.dk/om-ollerup/formal-amp-vaerdigrundlag/historie> (2021年10月1日閲覧)

- (32) Korsgaard, Ove (1982): "*Kampen om kroppen*". Gyldendal.
- (33) Melnick, Samantha (2015): "Per Henrik Ling – Pioneer of physiotherapy and gymnastics" in *European Journal of Physical Education and Sport Science*, Volume 1, Issue 1. pp.13-18.
- (34) Naul, Roland (1998): "Dansk gymnastiks europæiske dimension" i *Idræt og samfund, krop og kultur*, Årg. 14, s. 35-49.
- (35) Nielsen, Niels Kayser (2005): *Body, Sports and Society in Norden: Essays in Cultural History*. Aarhus University Press.
- (36) Nielsen, Rask (1950): Niels Bukh. Danske Forlag.
- (37) Ringling, Anne-Sofie; Trangbæk, Else: *Pehr Henrik Ling i Den Store Danske* på lex.dk. Hentet 22. oktober 2021 fra [https://denstoredanske.lex.dk/Pehr\\_Henrik\\_Ling](https://denstoredanske.lex.dk/Pehr_Henrik_Ling)